

日本の精神性について

96K069 長嶋孝二

はじめに——この論文の注意事項

これは卒業論文である。卒業「論文」である以上、当然論文の体裁をとっていなければならないのだが、私がこれから書くこの卒業論文に関しては恐らくその限りではなくなると思う。それは、この卒業論文中の多くに私自身の大学での経験や私自身の主観的意見が含まれているからである。だからこれはいわゆる論文調の論文ではなくなるけれども、私自身はむしろそれで良いと思っている。というのも、卒業論文は大学生活最後のまとめとして書かれるものであり、そうである以上は私自身の大学生活を振り返る必要があると思うからである。

これから書かれる卒業論文は、私自身の大学生活の集大成である。

序文——私自身の経験から

私は最初、キリスト教系の大学である敬和学園大学に対して、多少の抵抗感があった。入学当初、私自身の「宗教」に対する固定観念や、大学内で行われるキリスト教に関連した授業・行事などから、「怪しげな学校」というイメージを払拭しきれなかったのだ（ただ宗教に関する固定観念に関しては、「私自身の」と言うよりもむしろ「一般的な」と言ったほうが正しいかもしれない）。だから私はそこにいながらにして敬和学園大学が好きになれなかった。「キリスト教系の学校」と聞いた時の周囲の目も、それを助長していた。

この時私が敬和学園大学に対して抱いていた悪い印象の原因、その大部分は「私自身の、そして一般的な、宗教に対する固定観念」が占めていた。私自身の固定観念とは即ち、一般的なそれに影響されたものであり、それは悪い印象をもたらすものだったのである。当時はちょうど新興宗教の犯罪行為が取り沙汰されていた時期でもあり、「宗教＝犯罪、危険」という図式が出来あがりつつあった。勿論、犯罪行為を犯した新興宗教は限定されるし、それは長い歴史を持つ宗教、キリスト教や仏教などとは全く異なるものであるということは私自身もわかっていた（恐らく、他の誰しもそうであったことだろう）。ただ、いくら全く異なるものであるからと言っても、同じ「宗教」というカテゴリーに属するものである以上、ある程度の混同は避けられなかったのである。だから、その当時に「大学で何の勉強を？」を聞かれても、「宗教関係」と答えることには抵抗があったし、たとえそう答えるにしても「かと言って怪しいものなんかではなくて…」といちいち説明するのにずいぶん骨を折ったものである。このような状況では、宗教関係の勉強をすることに確固たる必要性を感じてもいなかった私にとって、敬和学園大学を好きになるというのはいささか難しい問題だったのである。

ただ、新興宗教の犯罪による「宗教」への悪印象は、宗教に対する固定観念という点において本質的な問題ではない。勿論、犯罪行為は言うまでもなく悪いことであり、許されるべきものではない。しかしここで述べるのは犯罪行為云々の話ではなくて、あくまでも宗教に対する固定観念の話である（特に言及はしなかったが、ここで述べている「固定観念」とは、日本におけるそれを指したものである）。確かに、その犯罪行為——要するに、例の一連のサリン散

布事件と、それに付随した数々の犯罪のことである——によって、「宗教」というものへの警戒心は強まったと言えるだろう。だから、この事件をきっかけに宗教に対する風当たりが強くなったと考えるのは不自然なことではないし、事実そうなのである。しかし、宗教に対する悪い意味での固定観念がここから根付き始めたと考えるのは間違いである。日本において宗教を危険視する風潮は、それ以前からも確かに存在していたのである。それは敢えて説明しなくとも、日本人ならば誰でも理解できることだろう。サリン事件の以前からも、例えばキリスト教徒であることを公言しているような人物に対しては、一般的な日本人ならばある種の警戒心を抱くというのは日常的なことであっただろう。私自身も例に漏れずそうだったのだが、何故そう感じるようになったのか、直接的な原因がどうも思い当たらない。いつの間にかそうになっていた、としか言いようがないのである。私個人の意見だけで決め付けてしまうのもどうかとは思いますが、どうやら日本人には宗教をタブー視する傾向があるようである。直接的な原因が思い当たらないのは、恐らく子供の頃からそういった環境に身を置いていたからであろう。あるいは、それを日本人の「国民性」と呼んでもいいかもしれない。とにかく、一般的な日本人を相手に自分が宗教家であると公言することに、プラスの要因がないことは確かである（ちなみに、私自身は宗教家ではない——と、こういうフォローをしてしまうことにも、自分がつくづく日本人であることを感じてしまう）。

そして、日本の、日本人のこういった傾向にこそ、実は深い問題が存在しているのである。それは、「日本人の精神性の空白」である。この場合の「精神性」とは、日本が日本である為に、日本人が日本人である為に必要となる「核」のことである。日本人としての志、日本人の出発点と言っても良いだろう。その精神性が、現在の日本には欠けているのである。これまで述べてきたように、日本には宗教をタブー視する傾向がある。また、それに関連して宗教的要素を持つものに対してもある種の拒否反応を示す傾向にあるようである。そして、「精神性」はそれを語る上で宗教的要素が少なからず関わってくるものである——例えば、欧米諸国の精神性にはキリスト教が深い関わりを持っているし、そもそも資本主義というシステムの発展自体に、キリスト教の宗教改革者であるカルヴァンが大きく影響を及ぼしている——から、日本人が「精神性」について論争することは難しいと言えるだろう。また、それ以前に「精神性」などというものを模索する必要はない、それどころか日本の精神性などという概念自体を思いつかない、というのが一般的だろう。確かに、そういったことを専門に勉強でもしていない限り、精神性が云々という話をされても、それこそ雲をつかむような話かもしれない。「日本には確固たる宗教も信念も無く、それは大きな問題だ」などと言われたところで、普通はピンと来ないだろう。しかしこう言えば少しは実感が湧くかもしれない。

「現在の日本にはモラルが無い。日常生活の中で崩壊していく道徳、複雑・多様化・低年齢化の進む犯罪、腐敗する権力、崩壊の一途をたどる学校制度…等々、挙げればきりがなくらいである。また、一向に回復しない経済も日本に暗い影を落としている。

これら全ての要素の原因が、実は日本に国としてのまとまり、即ち精神性が欠如していると言う一点に集約されているのである。」

あるいはこれは極論であると言えるかもしれない。こんなことを言えば、普通は一笑に付されるのが関の山だろう。しかし今述べた様な「日本におけるモラルの崩壊」は、現実起こっ

ている事態である。それを解決するには根本的な問題を解明し、それに対する解決策を模索しなければならない。そしてその模索はあらゆる面から行われ、あらゆる可能性から追及されるべきものである。こういった巨大で得体の知れない問題に対しては、その解決策への可能性を閉ざしてしまうべきではないのである。例えそれが一介の学生による、たかだか自分の学生生活をまとめたに過ぎない卒業論文だとしても、である。この点に関して私は自分の意見を曲げるつもりはないし、そもそもこれを否定してしまったら、私がこの卒業論文を書く意味の半分が失われてしまうことになる。

そういう訳で、この卒業論文では現代日本におけるもろもろの問題の原因を「精神性の欠如」によるものと想定し、その問題点を追及、解決策を模索してみたいと思う。

そういえば話を一番最初に戻すが、私はこういうことを真剣に考え、またこの様な形としてまとめられる機会を与えてくれた敬和学園大学が、今では好きになっている。

第一章 日本の問題点について

序文でも述べたように、現代の日本には宗教をタブー視する傾向があるようである。その原因は古く、織田信長による比叡山焼き討ちで宗教に対するタブー視が刷り込まれたからだという説もある。あるいはそういう理由であるのかもしれないが、近現代に的を絞って考えると、第二次世界大戦後の「天皇人間宣言」に端を発しているのではないかと思われる。少なくともそれ以前までは日本に「神」である天皇が存在していたわけだから、神仏の類を語ることにそれほど抵抗はなかった筈である。しかし人間宣言以降、神としての絶対的な天皇は失われてしまった。「絶対的な天皇」消失のショックと、その後の戦後歴史教育による天皇制下の日本のイメージ低下——こんなことを言ってしまうと、戦中の日本の立場を擁護する「自由主義史観」のはしりだと言われてしまうかもしれないが、そういう意味ではなく、少なくとも私と同世代の人が普通に義務教育を受けた場合に、戦時天皇制とその下の日本ないしは天皇制や日本そのものに対してあまり良くないイメージを抱いてしまうことは決して珍しいことではないだろう、と言っているのである——により、神仏の類を語ることに禁忌の念を感じるようになってしまったのではないだろうか。「象徴」としての天皇制は現在の日本にも残ってはいるものの、「絶対的なもの」としての天皇制は失われてしまったのである（実は現在の象徴天皇制も一般的に認知されている以上の役割を持っているのだが、そのことについては後述することにする）。

ともかく、日本は敗戦によって「絶対的なもの」を失い、心の拠り所を失った。更に戦後の教育で「神」としての天皇に統制されてきた日本を否定してきたことにより、いつしか「絶対的なもの」をタブー視するようになつてしまったのである。（但しこの様な状態に至るまでには様々な混同が存在している。本来、第二次世界大戦自体「絶対的な存在」である天皇が独自に始めたなどというものでは勿論なかったし、それを否定されたからといって他の神仏の類を語ることにまで禁忌の対象とすることはなかった筈なのである。しかし、そういったことを冷静に判断させる余裕をなくす程に敗戦のショックは大きなものだったし、そこから目を背ける為にはある程度それに触れないようにすることも必要だったのである。そうしてある程度ぼかされてしまった様々な要素、つまり「神としての天皇」「天皇を利用した軍部の侵略行為」「敗戦により否定された神としての天皇」などが、悪い方向で渾然一体となり、神仏の類を語ることが悪徳に近いものとされるようになってしまったのであろう。目を背ける為に「語らな

かったこと」が「語ってはならないこと」に変質してしまったのである。事実、戦争経験者の中には、戦争を思い出したくない、あるいは自分たちの子や孫の世代にわざわざ残酷な戦争の話の聞かせたくない、等の理由で口をつぐんでしまう方も大勢いるのである。）

この神仏の類、そしてそれに似た要素を持つものへのタブー視が、日本に様々な弊害を生じさせてしまっているのである。それが序文で少し触れたような道徳の崩壊に始まる種々の問題である。何故タブー視がこの様な問題を生じさせてしまうのかと言えば、それはこのタブー視によって日本人の日本人としての精神の根幹部分に隙が生じ、それを埋めるものがなくなってしまふからなのである。それは自分のスタイルを知らないまま、自分が一体何者で、何を目標として生きているのかという事を考えないまま生きているようなもので、要するにこれが先に触れた「精神性の空白」という状態なのである。勿論、個々の日本人としては自分のスタイルを確立し、目標を持って生きている人は大勢いるだろう。しかしここで言っているのは個人レベルのものではなく、日本という国としての精神性の空白のことである。日本は戦後から神仏の類をタブー視することにより、それに類する精神面での話——つまり、「国家目標」であるとか「国家意志」であるとかの要素も、である——をも毛嫌いする様になってしまい、そのことによりいつしか本当に国としての精神、国としての意志を失ってしまったのである。

この問題は戦後から現在まで連綿と続いているものではあったが、それが明るみに出て問題視されるようになったのはここ最近、少なくともバブル崩壊以降からである。何故か。それはバブル崩壊の時期までは日本に国家目標があったからである。言っていることが矛盾していると思われるかもしれないが、実際はそうではない。日本がその時期まで抱いていた国家目標とは、国家としての本質的な目標ではなく、「経済でトップに立つ」という一時的な目標に過ぎなかったからである。戦後日本はそれを目標とし、事実爆発的な勢いで経済成長を遂げた。そして事実上のトップに立った80年代後半——その目標を失ってしまったのである。それはそうである。遂げられる目標を遂げてしまった時に、その目標が失われてしまうのは当然のことである。それは当然のことなのだが、問題は日本にそれを超える目標がなく、また自らがどのようなスタイルで行くべきなのかということを考えていなかった、ということなのである。要するに、臭いものに一時蓋をして匂いをごまかしたところで、その蓋が開いてしまえばやはり臭いままだった、ということなのである。だから80年代の後半に経済の面でトップに立って目標を達成した時に、その目標がバブルと共に弾けて「蓋」がはずされ、自分が何を目指し、どのようなスタイルで行けば良いのかということがわからなくなってしまったのである。その先に待っているのは当然「混乱」である。今まで上手くいっていたものが突然上手くいかなくなり、しかもその時何をすれば良いかわからなくなれば、混乱するのは当然のことである。その混乱が、道徳観の崩壊などの様々な問題を引き起こしているのである（個々の人間でも、生きる糧を失ってしまった場合は、あまり良い結果を生むとは言えないだろう。一概には言えないかもしれないが、精神的に退廃する傾向を見せたとしても決して珍しいことではない）。

但し、道徳観の崩壊などの問題は、日本の目的喪失＝精神性の空白という原因の他にも、それを助長しているものがある。それは「日本が民主化に迎合し過ぎている」という点である。ここで言う「民主化」とは民主主義という制度そのものではなく、そこから生じる「自由」とか「平等」などの要素のことである。そういった意味で、日本は民主化し過ぎていると言ってもよい。何もそれが悪いと言っているのではないのだ。ただ、日本のそれは根拠が希薄で、言葉が先行する傾向があるのである。例えば欧米における「自由」とか「平等」は、キリスト教

的な精神をその礎としている。しかし日本の場合それは敗戦時にアメリカから与えられた憲法をその根拠としている。そして日本はキリスト教国ではない。にもかかわらず、日本は敗戦以来その立場上欧米型の「自由」と「平等」に迎合していかざるを得なかったのである。そうしてきた結果、現在出来上がったのが「自由」や「平等」の意味をはき違えた日本社会なのである。だから現在の日本で言われる「自由」の意味は「個人の権利を尊重し、また個人の責任をも全うする」ようなものではなく、「個人の権利を尊重し、また個人を責任から解放する」ようなものに成り下がってしまっている。この「自由」の意味をはき違えた社会の傾向が、目的を見失って精神性を空白化させた結果生じた混乱の状態を助長し、道徳観の崩壊などの問題を顕著にしたのである。

では現在のこのような状況を打破する為にはどうすれば良いのであろうか。その答えは単純、精神性の空白を埋めるものを見つけ出せばよいのである。日本が日本であるという根拠を探求し、日本の進むべき方向性を指し示せばよいのである。ただ、それを行うのは難しい。それを見つけ出し、更にそのことを意識するというのは容易ではないことである。まず大体からして殆どの一般的日本人が精神性云々などということに気にもしていない、という問題がある。またそういった話題に対する抵抗感、タブー視というものが依然として存在し続けている。これらの問題をクリアし、日本（人）に適合する精神性を探求するという事は、慎重に行わなければならないに近いと言ってもよいであろう。また、仮にその様な精神性があっても、それを体現する人物でもない限り、結局は机上の空論になってしまいがちである。このように、一口に「精神性を探求する」と言っても、問題は山積みなのである。

とは言っても、それらの問題を憂慮し過ぎて、本来の「精神性の探求」を怠ってしまったり、それこそ話が全く進まない。ここから先はその「精神性」を、私が大学の4年間で学んできたことから探求していきたいと思う。だから参考文献がそのまま登場するということは殆どなく、普通で言うところの「卒業論文」とは大分異なった形になるだろう（その点は最初に断った通りである）。ただ、私が4年間で学んだことの中には、既存の幾つもの文献から来ているものも恐らく多く含まれているであろうということを含め断っておく。

第二章 天皇制と精神性

「日本の象徴は？」と尋ねられれば、多くの日本人は「天皇」と答えるであろう。それはそうだが、事実天皇は「日本の象徴」という立場に立っているのである。しかしその「象徴」というものの意味を考えることは普通あまりないことであろう。それどころか——少なくとも私と同世代では——「天皇」というものを全く意識しない、ということも決して珍しくはないことである。表面的には、日本において天皇制があまり大きな役割を果たしていないように見える。しかし、この「天皇制」は、それを改めて考え直してみると、日本の精神性の重要な鍵となり得る可能性を秘めているのである。

「日本信仰」というものがある。聞き慣れない言葉ではあるが、これは殆どの日本人が日本に対して抱いている思いである。この「日本信仰」とは、『至誠心の神学』——ゼミの延原時行先生が書いた本だ——の中で少し触れられているもので、「日本人が日本という国に対して何となしに抱いている信頼感のようなもの」のことである。但しこれは意識的に行っている信仰ではなく、あくまで「何となく」感じているものである。だから、「そんなものは感じてい

ない」と言われてもおかしいことではない（実際、私が初めてこの「日本信仰」の話を聞いたときもそう思った）。ただこれはそんなに大げさなものではなく、「日本にいればとりあえず大丈夫、安心だろう」とか「日本にいればどうにかなるだろう」といった程度のものである。その程度の思いであるといえ、何となく理解していただけるかと思う。

確かに我々一般的な日本人はそのような「日本信仰」を抱いているのかもしれない。昨今の日本には前章までに述べたような問題点はあるものの、「まあ何とかなるだろう」という楽観的な見方をする風潮も確かに存在するからである（ただ、楽観視しているだけでは問題は解決しないから、それが問題だと言えば問題である）。結局のところ、日本人は日本に対して妙な安心感を抱いているのかもしれない。それでは、その安心感はい体どこから来ているのであろうか。その原因は見えにくいものではあるが、そこで登場するのが天皇制なのである。日本における天皇制の構造が、日本に対する安心感、「日本信仰」を生み出す原因となっているのである。日本における天皇制は、行政との二重構造で成り立っている。国家の元首（普通は「象徴」と呼ばれるが）を天皇としながらも、実際の政治を行う行政はそれとは別の所にあるという、要するに権威と権力の分断された構造で成り立っているのである。この構造の下では天皇は行政に介入できないが、その代わりに純粋な「権威の象徴」としての立場を保持することが出来る。逆に言えばこれは、行政の側がどのような状態になろうと天皇の側に影響は出ない、ということでもある。そしてそのことが、日本に「日本信仰」をもたらす原因になっているのである。つまり、現在の日本の政治状況が如何に悪化しようと、日本の状況全体が悪くなろうと、日本の権威の象徴である天皇がそれに影響を受けずに変わらず存在しているから、「日本は安心」という感覚が生じるのである（ただ、第二次世界大戦中はその構造が完全に崩壊していたと言える。大戦中は軍部が天皇の権威を利用した挙句、内閣に口を出させる際も与えなかった為、二重の構造という図式自体が成立していなかったからである。この時天皇は権威の象徴というよりは——もっとも当時はまだ「象徴天皇制」ではなかったが——兵士や国民の士気を高める為の「忠誠心の対象」としての役割を担わされていたのである）。

しかし、この章の冒頭で述べたように、普段から天皇のことを意識はしていない、という日本人も大勢いることだろう。そういう人々にとっては「日本信仰」の直接的な原因が天皇制の二重構造にあるとは言えないかもしれないが、その場合でもやはり間接的に天皇制が関わってくるのである。と言うのも、「日本信仰」が日本の中だけで誕生したものではなく、天皇制を意識しながら日本を見ている諸外国の日本に対するイメージ（少々わかりにくい）が、遠回しに日本に入り込み、やがて日本人自身の日本に対するイメージ「日本信仰」へと変質するからである。これはつまり天皇制に対するイメージの逆輸入のようなもので、もともと日本にあるもの（天皇制）に諸外国が高い評価を下し、それを見た日本が天皇制を再評価する、という図式になっているのである。だから自らが自分自身の感覚で日本を見ているつもりでも、そこには様々な影響が絡んでいるのである（前章で述べた様に日本は「民主的過ぎる」傾向にある為、諸外国、特に現代日本の生みの親とも言えるアメリカの意見などは非常に簡単に聞き入れるようである。その傾向は特に私と同世代の人々に顕著である）。とは言っても、諸外国が日本を評価する時に直接「天皇制」を口にするわけではなく、あくまでも「日本を見るとき要素の一つとして天皇制が含まれている」のである。だから目に見えるところに「天皇制」の言葉が見当たらなくても、実際はその影響を受けているのである。

それでは、諸外国は戦後の天皇制をどのように評価しているのであろうか。結論から言えば、

意外に（と言ってしまうのも何だが）高い評価を受けているのである。それは主にかつての世界最大の社会主義国であった旧ソ連との比較から生じている。単純に言って、天皇制は旧ソ連の社会主義よりも長持ちしている。それだけのことはあるが、そのことだけでも天皇制は高い評価を受けているのである。東西冷戦の一翼を担った旧ソ連の社会主義が崩壊した後も変わらず存続し続けているのだから、確かに社会主義よりも優れた制度であると言えるかもしれない。ただそこには戦時中の日本の狂気とも言える行動の原動力となった天皇制——少なくとも表向きにはそういうことになっている——に対するの畏怖の念がいまだに影響を及ぼしているとも考えられる。いずれにしろ、諸外国の天皇制に対する評価は、日本国内で普通に思われているよりも高いものなのである（但し、中国や韓国、あるいは北朝鮮など、戦時中に日本によって被害を被ったアジア諸国などはその限りではないだろう。例えば韓国などはいまだに「天皇」という呼称を嫌って「日王」という名前が使われている。しかしそういったことも逆に考えれば、日本が思う以上に天皇制というものが注目されている、ということでもある）。そういった評価で周囲の諸外国に見られていることにより、日本人が日本を顧みる時にそれが影響を及ぼし、知らず知らずの内に天皇制を自らの内に浸透させ、日本に対する一種の安心感、「日本信仰」を生じさせているのである。だから日本自身が一度このことを自覚し、天皇制の及ぼす効果を見つめ直せば、よりはっきりと目に見える形での「日本信仰」を形成することが出来る可能性があるのである。それができれば、日本信仰を日本の精神性の足がかりとすることも出来るであろう。

さて、天皇制が生み出す「日本信仰」について述べたところで、次は天皇制それ自体について考えてみたい。ここで考えるのは、「天皇制自体が日本の精神性となり得るか」ということである。天皇制によって生じる「日本信仰」は、日本人自身がそれを自覚することによって日本という国を見つめ直し、「日本が日本である」理由は何なのかということを考え直す、要するに精神性を探求するきっかけになるかもしれないものである。ということは、それを生み出す天皇制というものが、更に一段上の「精神性そのもの」になり得るとしても不思議ではない筈である。

『至誠心の神学』の中に、精神性について触れられている箇所がある。その内容は「精神性やモラルにはその基準となるもの、手本となるものが必要である。これは例えば仏教における空などの原理ではなく、そういったものを悟って実践する人格である。しかしその手本となるのは自己を絶対化するような者ではなく、究極的な原理や真理を指し示す者である。つまり全てを自己で達成したではなく、非達成の要素を含んだ者なのである」というものである。要するに精神性などを説く場合には、それを実践する手本が必要で、その手本は自己完結してしまっているような人物・人格であってはならない、ということである。例えばキリスト教を考えた場合にわかることで、キリスト教が広まる発端となった人物は自ら教えを説きながらそれを実践していた（聖書によれば）イエスであったが、そのイエスは全てを完全に達成していたわけではなく、その上には神という究極者がいたのである（但しキリスト教的な神は究極的な「原理」というよりはむしろ「人格」に近いものであるが、その話はひとまず置いておこう）。それではここで天皇制を考えてみよう。天皇とは当然、「人格」である。しかし、自ら教えを説いて究極的な真理を指し示すようなことはしていない。むしろどちらかと言えば「日本の象徴」

という名前だけで、その人格としての中身はまるでわからないというのが実情である。これだけ考えると天皇というものはとても精神性を担えるようには思えないかもしれないが、実際はそうとは言いきれないのである。それは何故なのか。それを解説するにはまず日本の特徴を改めて見直さなければならない。

前述したことと重なる部分もあるが、日本はその特徴として「民主的過ぎるくらいに民主的」であり、共同体意識が強く、集団主義を重視する国である。この内「民主的である」こと、特に先に少し触れたようにアメリカの意見をすぐに聞き入れてしまうという点は、戦後の日本の立場であるとか日米関係などから生じたものであるが、「共同体意識が強い」とか「集団主義を重視する」だとかの要素は、そのような後天的な原因と言うよりはむしろ日本人の国民性であると言える。日本はその国民性から「曖昧」な国であると言われることがあるし、実際その通りである。このような国柄から、日本ではあまりはっきりとし過ぎることは敬遠されがちな傾向にあるし、周囲から抜きん出た「個」はともすれば排除しようとする場合さえある（そういえばこの傾向に反して1999年の流行語には「カリスマ」という言葉があった。これはもしかしたら日本で埋没しがちな「個」の特性を、絶対的な魅力や技術を持つ者に求めた結果なのかもしれない。こういった身近なところから、日本に欠けているもの、そして求められているものの正体が見え隠れするのだとも考えられる）。日本はこのような特徴を持っているわけだが、ここで話を天皇制に戻すと、前述した天皇の人格的特性——「人格」でありながら「象徴」であり、究極的な真理を指し示すようなことはせず、「人格」としての中身ははっきりとしていない——は、この日本の特徴と適合していることが見て取れる。つまり日本における天皇は強権を持った絶対者ではなく、「象徴」という「権威」を持った者に過ぎず、その人格としての中身はまるでわからないから、その特性が曖昧で確定的な要素を嫌う日本の特徴に合っているのである。無理にまとめようとすれば拒否反応を起こしかねない日本人にとっては、中身が空っぽの（と言ってしまうのは不謹慎かもしれないが、「定義がはっきりしない」という意味である）天皇というものの方がその「象徴」として適合しているのである。またこれは天皇に限った話ではなく、日本において上に立つ者はなるべく空っぽの方が向いているのだとも言える。それは日本の特徴から言えることではあるが、もしかしたら上に立つ者の中身が空っぽであることにより、それを「器」として日本人の精神が集合し易いのもかもしれない。ともあれ、これまで述べたような日本の特徴とそれに見合った天皇の在り方から、日本における精神性のあるべき姿、方向性が見えてくると言える。ここでそれを少しまとめてみよう。

まず、日本における精神性は、日本の「共同体意識が強く、集団主義を重視し、（少なくとも身近なところでは）突出したものを敬遠する」という傾向・国民性から、「独善的で確定的なもの」であってはならない。その為、絶対主義的な要素を持ち、それを伝道しようとするキリスト教などは日本に適合しにくく、逆に仏教における「空の原理（正直・協調性などの要素を持つ。詳しくは第三章で触れるつもりである）」などは適合し易い。まあ、一応は「仏教国」の体裁をとっているのだから、当然と言えば当然のことではある。しかし、この「空の原理」に代表される「原理」というものはあくまでも「原理」であって、直接的な「精神性・モラル」ではない。これを日本の指針であり、モラルの原点である精神性に昇華させるには、その原理を体現する人格がなくてはならない。但し日本においては今述べたように絶対的な人格は敬遠される傾向にあるし、「空の原理」を体現する者はまさしく「空」の人格でなくてはならない。

こういったことから、日本における精神性のあるべき姿がわかると思うが、今述べたようなことに「天皇制」が非常に近いということもわかっていただけだと思う。ということは、日本における精神性というものは既にその姿を現していることになる（尚、ここで言う「天皇制」においては、天皇個人の人格は重要ではなく、「天皇」という名から生じる象徴性、権威こそが重要なものなのである。但し、原理を体現するという意味においては「人格」が重要になるが、その「人格」も天皇個人の「性格」というものではなく、天皇が「人間」であることで既に事足りている）。しかし日本において精神性やモラルが欠けているのは事実だし、天皇制にしても普段から重要視されているわけではない。それは何故なのか。それは、日本がそういった話題をタブー視しているということもそうだが、日本が「空の原理」で生きているというのにそれを自身で意識せず、意識したところでそれを卑下し、むしろ欧米的なものに対して羨望の眼差しを向けてしまいがちなところに原因があるのである。ということは、日本に足りないのは精神性ではなく、「自覚」と「自信」であると言える。つまり日本がこの「自覚」と「自信」を抱けば、現在の日本のモラル崩壊などの問題は解決の方向に向かうと言えるであろう。しかしそうは言っても「自覚」と「自信」を持つというのは容易なことではない。それを持つには既存の精神性を見直すだけでは難しいだろう。既存のものだけではなく、また新たな方向性を見出す必要があるのである。ここからは、その新たな方向性を探ってみたいと思う。

ちなみに、この章の内容から誤解されると困るのだが、私は極端な右寄りの国粋主義者ではない。こういうことを一応断っておかなければならない風潮があるのは、非常に鬱陶しい事だと思う。

第三章 東西の対話

さて、日本が自信を取り戻し、新たな精神性を抱く為には、それ相応のスケールを持った考え方で臨まなければならない。そういうわけでここからは日本国内から生じる精神性だけでなく、世界的な観点から見た日本の精神性を追求してみたい。ここで考えていくのは、「東西の融合・対話」という可能性についてである。

先に述べたように、日本は仏教的な「空の原理」で生きている。空の原理というのは本来「超人格的な宇宙の理法、宇宙の原理」のことで、仏教においてよく「色即是空、空即是色（修行によって空を体感しようと努力するうちに空に執着していることに気付き、改めて現世に立ち帰るという一連のプロセスを表した言葉）」などと言われるものであるが、この「宇宙の原理」という意味から派生して、「和」や「協調性」、「共生」という要素も持っている。これらの要素は、今まで述べてきた様な日本の特徴と適合しており、そのことから日本が空の原理で生きていると言えるのである。しかしこの空の原理というものは非常に形が捉えにくい（「形」というのも空の原理にはそぐわないのだが）。その為、日本ではそれがあるということも気付かれていない上に、欧米的なものを良しとする傾向がある。日本のこのような現状は、ともすれば欧米文明＝キリスト教文明に簡単に呑み込まれてしまいがちである。文明の影響を受けるということは、知らず知らずのうちにその文明の根底にある思想・宗教等の影響を受けるということでもある。しかもキリスト教は先にも少し触れたように絶対主義的な傾向がある

から、現在の日本の状況ではキリスト教文明の「思想的侵略」に耐えることは難しいと言える（絶対主義的なキリスト教の側面を最もよく体現している国はアメリカであろう。アメリカは自己の「正義」を絶対的なものとし、その原理にそぐわないものに対して「制裁」を加えるという傾向を持っている。またその逆にアメリカの政治の方針に従わない国を「正義に反している」としてあげることさえある、実は非常に恐ろしい国がアメリカである。キリスト教文明は、そのような「怪物」を生み出すことさえあるのだ）。

ただでさえ1991年のソ連崩壊によって世界にキリスト教の巨大なベルトが出来上がりつつあるというのに、この上アジアの代表格である日本までもがキリスト教文明に呑み込まれてしまえば、その先に考えられるのはキリスト教文明の暴走である。競争相手のいない単一の強大なイデオロギーが秩序を乱すであろうことは、二極の対立という面を持ちながらもそれによって世界の均衡を保ち、秩序を守ってきた冷戦の終結がもたらした現在の穏やかでない社会情勢——各地の内戦、紛争など——を見ればわかることである。このことから、日本がキリスト教文明に呑み込まれてしまうか否かが、今後の世界の行く末に大きく影響するのだと言えるであろう。それでは、その強大なキリスト教文明に呑み込まれずに共存していく道はあるのであろうか。その答えとなるのが、「東西の融合・対話」なのである。このことは日本が仏教的空の原理で生きる国柄を持ちながら欧米的な文明を取り入れていること、そして日本の地理的位置が東洋と西洋の間地点に位置していることなどから、ある意味では日本の宿命であるとも言える。『文明の衝突』の中で著者サミュエル・ハンティントンは東西文明の完全な融合は無いと述べていたが、同時にその本の中で唯一「単一の文明」として扱われている日本ならば、それを打開できるかもしれないのである。

東西文明の融合・対話というのは、イコール東洋的空の原理と西洋的キリスト教思想の融合・対話である。しかし先にも述べたように空の原理はあくまで「宇宙の原理」だから、その形が捉えにくく、ともすれば絶対主義的傾向を持ち、よりはっきりとした教理と人格的神を抱くキリスト教の前にその姿が霞んでしまいがちである。だから空の原理をもってキリスト教と対話を進める為には、何故その対話が必要なのかということを明確に指し示す必要があるのである。それでは何故その対話が必要なのかということを考えていこう。まず、東洋的空の原理は「原理」、キリスト教の神は「人格的神」である。このキリスト教における「人格的神」の信仰のあり方に実は隙間があり、その隙間を埋めるものが「空の原理」なのである。それは一体どうということなのか、少し解説してみよう。

「信仰」のあり方には二通りの場合がある。それは「一方的な信仰」と「相互的な信仰」である。この内の「一方的な信仰」というのは「忠誠」という言葉に置き換えられる。忠誠とは即ち、社会の頂点に立つ者にその社会の構成員全体の人心を糾合するものである。これは主に主従関係で表されるもので、例えば戦時中の日本における天皇と国民の関係などがこれに当たる。しかしこれは忠誠される側が忠誠する側に何かの形で応えない限り一方的なものであるから、人心を糾合するあり方としては問題がある。これに対して「相互的な信仰」は忠誠とは異なり、信仰される側が信仰する側に応えるという、正に相互的な関係である。例えば、キリスト教におけるイエスとその教えを受ける人々との関係などはこれに当たるし、仏教における阿彌陀と衆生の関係——阿彌陀は全ての人々を救う——もそうだ。この「相互的な信仰」と先に述べた「一方的な信仰（忠誠）」の相違点はこれだけではなく、更に先がある。その相違点とは、「信仰（忠誠）される者自身は何かを信仰する者なのか」という問題の中に存在している。

信仰される者自身が何かを信仰していない限り、その者に対する信仰というものの説得力が薄れてしまう（何も信じていない者を信じるというのは妙な話である）。

この点について言えば、例えば仏教において信仰される阿弥陀などは「空の原理」を信じる、というか悟ろうとする者であるから、この条件を満たしていると言えよう。それではキリスト教の場合はどうであろうか。キリスト教において信仰されるイエスも、その上の「神」を信じる者であるから、この条件を満たしているかのように見える。しかしキリスト教における「神」は「空の原理」などの「原理」とは違い、「人格的」神である。またこの人格的神はイエスからの信仰と共に直接他の信徒からの信仰の対象にもなっている。ということは、この神自身も何かを信じる者でなくてはならない筈だが、キリスト教の神は「宗教的究極者」であるから、何かを信じるということがない（キリスト教においては全てが神から始まっている）。キリスト教においては神が究極者であり、宇宙の原理などはその後からついてくるものなのである。このことが、キリスト教が絶対主義的傾向を持つそもそもの原因であると言える。しかしやはり世界の構成要因——形而上学的究極者＝宇宙の原理、宗教的究極者＝神、そして世界そのもの——の関係性を考えれば、原理は人格的神に先立つべきなのである。この点に、東洋的空の原理と西洋的キリスト教思想の対話の切り口があるのである。

こういうことを言うてしまうとキリスト教の信徒には憤慨されるかもしれないが、人格的神は宇宙の原理に基づかなければならないし、宇宙の原理もそれだけではその存在を示すことは難しいから、それを体現する人格的神が必要なのである。この東洋的原理と西洋的神との対話・融合が、今後の世界に新たな秩序を構成する鍵となり得るのである。そしてそれを担うのが、空の原理で生き、西洋文明を持ち、地理的にも政治的にも東洋・西洋の中間に位置する国、日本なのである。この東洋と西洋の対話・融合が実現すれば、その出発点である日本には世界的規模の精神性が生じることになる。日本がそのような巨大な精神的プロジェクトを担う役割を持っていることを知れば、国としての自信を取り戻すことも可能であろう。そしてそれを「知る」ということも、「日本には精神的なものが欠けている」とマスコミ等で度々叫ばれるようになった昨今、そう遠い話ではないのかもしれない。ただ、それが求められた時に、精神論を専門に学んできたような人が、わかる人にだけわかる専門用語を駆使して精神論をぶっていたのでは、事態は何も変わらないだろう。日本で精神論を語るのであれば、如何に自然に、且つ一般的な言葉で語るかが重要になるであろう。いきなり難解な言葉で権威のありそうな言葉を並べられても、普通は見向きもしないからである。日本における精神論は、もはや「研究」だけでなく、「如何にして広めるのか」を考えなければならない段階に来ていると思うのだが、どうだろうか。

結語

日本はだめな国である。少なくとも、現段階では素晴らしい国だとは言い難い。それは、日本に精神が欠けているからである。精神のない国は筋が通っておらず、適当、いい加減で、物事に対する対処の仕方に一貫性がない。その状態を脱するには、自分に合ったスタイルを考えていけば良い。私はこの論文で自分なりにその「スタイル」を考えつつもりだが、もしかしたら全然何の役にも立っていないのかもしれない。しかし、まずは考えてみるのが状況改善への第一歩であると思うし、私が大学4年間で学んできたことをとりあえず一通りまとめられただけでも、この論文を書いたことには意味があった。勝手に書いて勝手に自己完結しては

世話がないかもしれないが、とにかくそういうことである。

感想ばかりではしまりがないので少しは結語らしいことを書こう。今まで日本の精神性について述べてきたが、日本が精神性を探求する上で最初のポイントとなるのが、自らを顧みる意味での自覚と反省である。しかしそれを行う為には、それ相応の機会が与えられなければならない。そういったことを考える機会を与えるのが教育であり、またそれこそが教育というものの本質であろう。そしてそういった本質的な教育を行うのが大学であり、それを行うことこそが大学の使命である。私はそれに足る十分な機会を与えてくれた大学で学べたことを、今では嬉しく思っている。

結局感想で終わってしまうが、以上が私の卒業論文である。

参考文献とそこから抽出したエッセンス

参考文献に関しては、具体的に「この本のこの部分を使った」というものが殆どない為、解説をつけるのが難しいが、論文中のどの部分にどの本のエッセンスを入れたのかを説明してみよう。勿論、その「エッセンス」というのも私なりの解釈によるものである。御了承いただきたい。

延原時行『至誠心の神学』行路社

これは論文中全体を通して何かと参考にさせていただいたが、特に「東西文明の融合」という考え方については、この本（というか延原先生御本人）に影響を受けたところが大きい。

サミュエル・ハンティントン著、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社

日本が単一の文明である、というのはこの本で触れられている。私が日本に重要な役割を見出したのにはその影響もある。しかしこの本が最も役に立ったのは、「文明の衝突」という考え方に私が反感を抱き、その反感がこの論文を書く原動力の一つになった、という点にある。

志茂望信『物語日本キリスト教史』新教出版社

この本が天皇制について何度も触れていることで、日本において天皇制が重要なものであることを認識できた。